

疲れてを歸れば書齋の牡丹

牡丹しつぼりと濡れて居る

ぼたん陽に息づける

牡丹つくづくわれ世にありぬ

ぼたん緋にバラック燃わ上らう

ぼたん咲いてる學校は授業中

みづな

赤軍使者はつはつ花ながら漬かり

赤軍使者づけは苦いのを明るい部屋

赤軍使者に朝茶づけ搔つ込んで居る

篠懸

篠懸の青葉となりは美美容院

食ふために働いて居る篠懸の青葉みち

篠懸の青葉ラヂオが鳴つて居る

青葉

青葉の蔭の黒い瞳だつた

青葉の蔭しろいものは女のうなじ

汗ばんだ人のいとしさ青葉に憩ふ

靴の紐結へば靴に映る青葉の影

アカシヤ

アカシヤの花白ふ晝のサイレン

矢車

矢車いけられて朝の事務机

飢餓行進

櫻時分と云ふに職の口を頼まれた

あとからあとから職の口が溜つて

退つ引きならぬ人ばかりの職の口

頼まれることの辛さ今宵も職の話

頼まれる方で行詰る職の話

腹を立ててはいけな職のない人だった

どの眼にも頼られて居るのか

職のことはもう頼まれまいと幾度思つたことか

弱い心がまた職を頼まれた

こんなに職のないもの許り作つてどうしやうと云ふんだ

梅が散り櫻が散り頼まれた職がない

夕餉に向へど頼まれた職が無い

職のない人らに胡魔化しは云へない

頼んで頼んで職のない人らの前途

行くところまで行くのか職のない人ら

女給

耳までのある濃い眉女給だと云ふた

人間の顔した耳飾りの鼻じろ

屈んで歩いてやがるハイヒール女給なんぞ

裸身

胸張りて佗しかろ女の裸身は

女の裸身の妬しさ馬に食はれろ

わが身なれどいとしい裸身

なりはひ

あいつ等に職業がものを云はして居る

職業はどうせ馬鹿なものさ

職のことは云ふまい注いで呉れ

臥床

病む心よかうも素直になるものか

珍しく妻を叱ることのいたつき

真日中を醒めて青葉の淋しいいたつき

病めばひよろひよろと儂い生命を踏み締め

薬吞めど吞めど熱除れず夕べとなる

午を醒めて熱ある寺の鐘鳴る

くらしに鉢植ゑが無い病んで思ふ

草花絶やさない家のこと妻と云ふ病床

病床を襲ふて来た失業の友だつた

病床に聞く失業の話子が三人あると云ふ

病人に勵まされて歸る失業の友の後姿

兎に角力づけて歸すほかはない失業の友

哀しいことだと妻の云ふ

病めど臥床ねどこにくさぐさの書置き散らし

病上りの顔は妻が剃かたつて臭かれて勤め

蒼穹

青ぞら五月となる水の音

青ぞら丘も畑も一とみどり

頭の上はみんな青ぞら

青空を負ふた足どりになるのです

青空働きに出かけます

此のころ家に病む者もない青ぞら

随筆

早春スナツブ

新編

早春 昭和六年 二月

雪

ハロウ！雪、雪、見わたす雪の世界だ、雪のスロウだ、スノウ
メンだ、五寸、八寸いや一尺『雪といふものは積つた額の倍に云ふも
ん』と古老は仰言る、けだしや暖國にあつては好況を招くマスコット
もドリケンともしてゐるのだ、やはらかい天恵の肌、雪のマドモアゼル
よ。

銀パスや二十年來の春の雪

雛飾り

雛祭りの用意もをさをさ怠りない、もう眼と鼻に迫つたやよひ三月上
己の節句こそは白酒を斟んでする少女たちのお祭りである、内裏雛、土
雛、芥子雛、繪雛などに配してクラシカルなデコレーションも美美し
い、年一年と變轉きはまらない世相にあつてアンダンテなナシヨナリテ
イの洗れも、奥ゆかしいものではある。

白酒に酔ひぬ小さき局たち

きさらぎ

雪さへ交へて寒さはまた急轉回、衣更替の名に恥ぢずスカーフ、グロ
ーヴがあちこちに復活『これダンピングよ』『でもモードね、わたしキ
ンクしちやつたわ』『あら？あんなところで寫眞撮つてるー』『若くつて
眞面目らしいユウね』テナもんやないか、ないか。

とてシヤンに逢ひけりペーヴ牙ね返る

温室

グリーン・ハウスでは今シクラメンの花盛りです、そとでは少女のくちびるのやうな梅が咲いて居やうてい頃に、室内は暖い興奮に晩春の肌ざほりを感じさせます、インカムの増加をはかる上からもかうした温室は殖えて行く傾向です、一足はやいリポート、田園界もだんだん科學的モンタージュの時代となつて來ます。

ひろ咲きの豚まんじゅうや残ン雪

櫻餅

陽氣の暖するところ魚も氷上に開り蛇も穴を出る、いはゆる蜚蜚の交である、餘寒とは云へもう見はるかす山山も蒼くやはらかに何處とない和やかさである『春は櫻餅から』とこの頃になると出はじめの風景、いちがいにリーヴングな人人の手段とのみ解したくない、そこには人間的なインタレストの欲求も潜んで居やうといふもの。

ポップ・ヘヤも買つて行きけり蕨餅

手

二月は手の感觸です、青白いセンセイションです、魅惑へのナン
 パー・ワンです、冷めたいなかにも一味のパツションを感じるのもそれ
 がためです、やがて紫のつばくろめも訪れるでせう、つば董もふくらみ
 を見せるでせう、かくて世のをとめたちの瞳も輝いて來ませう、マニキ
 ユアもお客を迎へだしました、シツクなシヨツプ・ガールの手を御覽な
 さう。

白き手に秘愁のありぬ二月來る

風船屋

晴れたり君よ、春は馬車に乗つてイー・ジーな郊外散歩と來ると、ハリ
 シヤンでなくつても『うららかならずや』を絶讀せずには居られませ
 ん、若し夫れ行手に青、赤、黄、風船玉のウイंकを發見した方があつ
 たならナンセンス味は一段と高調して來ると云ふものです、この『春の
 マリちゃん』の存在こそ酔っぱらひの昇天にも勝して新藝術派クラブと
 やらの旗じるしでもあります。

浅春や風船の色のとりどりに

寒 烟

寒は寸延びに延びてゐます、みづみづしい宵をいっばいに漲らせて
 ゐるたかを頬に感ずるほどの風が時折かすめては行きます、フレツシユ
 な春のにはひ、フランクな郊外生活、われらのソプラノ揚雲雀のタキシ
 ードな姿がこの縁のステージにサン・ライトを浴びるのももう直ぐで
 す、蓋しこれからのカジノ・ド・フォリーはツクリもののバンドや脂粉
 のなかにばかりあるわけではありません。

病む頃のノスタルジアや麥青む

カツフェ

光のプリズム、イルミネーションの交錯、くるくる廻る近東風な赤い
 赤い風車、まだ早い春宵と云ふにもう街の灯は時代相をめぐつて手招き
 してゐる、エロと機奇の萬華鏡、シャンデリヤの下ビクトローラの喧
 噪、ウエトレスの浮氣なエクボ、さては肢体的なウエーヴ、不景氣知ら
 ずだとあるカツフェの響音はどうだ、ダンス、レヴューの取込みも遠か
 るまいが若きアンコたちよ、あくまでも明朗であり新鮮であれ。

四季被るベレーの色や春のアミ

驅除

たたなはる綿雲、プラチナ色の光、サムシングを含んだ陽の煌めき、そこはかかない醜氣、樹樹はいつせいに隋眠を揺り動かされて来るのである、冷厳な冬鬼の重壓に直面するこれらのプロテストな屈伸、芽ばゆるもののアツピールによる寄生虫の驅除も正にこの時季である、而してこの除去を轉化のモメントとして更生のトロツトも軽く、トリオの春は訪れて来る。

マ・ド・ンナは宜ひにけり春の雲

試験期

きざらぎの終りからかけて中等學校では卒業試験で夜の間もつむれない、伸び行く者の段階だけに眞剣味も自づと違つて来る、未來のアドミラルを氣取るもの、第三王國のライターを任ずるもの、さては労働黨首領を夢るイデオロギストの卵たちが巢立つのである、このごろの圖書館ではかうしたテストに備へるための學生たちがノートへのコレクト、リーダーの復習、ミステークの語らひで大入滿員。

校門の誓ひそらの蒼かりき

婦線を往く

昭和六年三月

タイピスト

婦人戦線異常あり！三一年のほからかさは近く訪れやうとするエボツク・メイキングな婦人公民権に一指を屈しなくてはなりません、職業社
會學上に進出して男性を著しくチエツクしつゝあるウイメン・ミス・タ
イピストの活躍振りからインタヴューのテープを切ります。

英文をたたたくはミスか音にはるる

バス・ガール

金融資本は自由を欲せず支配を欲するとレーニンは云つて居ます、資本主義的テイコク主義下にあつて分業網は急速な營利的浸潤性を「文化」にカムフラつて諸種の出現を促して居ます、ゴムのやうに弾力あるバス・ガールのサービスにもこもつた社會性を見脱すわけには行きません

コムソモールカに似たるもありぬバス・ガール

テレフォン・ガール

電光のやうな鋭さ、機械的な正確さ、都市のハ神経をあづかる電話交換嬢の素晴らしい不断の努力「もしもし、ボクあなたが大好き」なんてスビードのエロを囁きかけるアン・ペレがこの頃メツキり多くなつた、従つてまた「ナフタリン見たいな奴」と時にはほんとうのしさんを怒らしちやうことも有るといふものです。

窓をあけて春を見て居ぬ交換手

オフィス・ガール

實直で繊細でセンシブルな彼女たち、課長の覚えも芽出度くて抜擢される男のクセにトーストを焼き立てるアンニユイ（このグルツベにこそ呪ひあれ）しかはあれドキュメントの整理、記帳の敏活さ、ソロベンを讀上げる金属性の聲もはれやかに響いて行くのです。

オフィスに女も交るやよひかな

スクール・ミス

わつくすくらあーしよん

！ 若き、いと若きスクールミスよ、ミストレスよ、モンテーンは云つたではないか、センセイの怒つた『猛悪』な容貌がいかにか児童心理に影響を及ぼすか、悪化せしめるか、絶對的ヘゲモニーを握つて教室に君臨する御身たちの使命こそ寔に重且大と云はなくてはならない、況して先天的母性への稟賦は吾吾をして一段たる信頼と期待とを抱かしめるのである。

校庭に柳青みぬをんな教師

エンジン・ガール

けふ八日は国際婦人デー、萬國のプロ・w o y、闘ひ取れ！と叫ばれる日です、エスエスエスエルでは十八歳で選挙權をもち社會的にリツパな生産單位となつて居ます、男に交つて出征もした、バリケードもつくつた、すべて男に負けないだけのタレントと力とを發見した結果だと云つて居ます。

作業服とれば女にてありぬ

デパート・ガール

ステント・グラスに五彩のイナヅマが映ゆるころ、百貨店の賑ひはまさにメーターの極點に達します、マヌカンを地で行つて一つにはアトラクションの意味も含まれたデパート・ガールの働きはむろん野郎どもの遠く及ぶところではありません、彼女の細腕は往往にして數人の家族をさへ支へて居ます。

デパートに稼げりうからやからかな

テラ・ガール

——男の職人時代はよく文句を聞きましたがとマスターは仰言る、ガールの出現となつては中學生にいたるまでテラがよつぽどたやすくなつた、店のサインにも利いてこのところ戦線に新鋭の氣を吐いて居ます、これからは同業者間でもだんだん考へられて來ませうと何處までもリアルなゴ主人……

テラさんなんどと男たちの春

ネオ・ウエトレス

試みに彼女らが秘めたノートをひもといて見ませう

文(キス) 五十せんから
 ショート・タイム 二えん
 ロング・タイム 五えんから
 オール・ナイト 十えん

これが、ブック内に疊み込まれた彼女らのメニューです、ことにマニアと看破されたが最後キスキイをユスつてのサウス・ポウがウンカーの如く、とは恐ろしや。

くちびるかルージュの色か蝨めける

ガソリン・ガール

若者よ何故泣くか、前途はこんなに展けてゐる、御身らのヒロインは、こんなにも埃のなかに踊つてゐる、経済的獨立を求めて展覧と進出してゐるのだ、奮い鼓のセンチもヴァニチーも克服してまつしぐらにオプロジェクトへ、新らしいナイトにはナツシユやパツカードはガソリンを注ぐ入用にしか過ぎない、若者よ、空には星も輝いてゐる、明日の天氣によみがへれ！

なりはひはガソリンを注ぐ女にて

サービス・ガール

大きく深い理想から發達したと云ふ赤い心の十字軍、看護婦人の健氣なサービスが時代を渡つた生活職線にどれだけ多くのカプセルとカンパトとを與へてゐることか、よしそれが私生活のカット・バックを變換することによつて酬いられてゐやうとも——病室から街頭へ、派出的奉仕の新案も彼女らの使命をして愈よアラたかならしめて居る。

看護婦の腫よ何を病む春か

シネ・ウエトレス

平面から立体へ、現代人の心臓でありモボ・モガのグランマーたる映画の跳躍は著しいものがあります、イニシャルな一と組、同性愛のシネ孫のやうな娘さん、E.T.Cの現象が殿堂内にエロまいて居るのも時勢的な波だと云へないことはありません、銀蛇上のストツプ・モーシヨンにみなみな夢中になつて居るときA・L.A・瞬間キユツセンの音、百科辭典のシネマ・ウエトレスの話は盡きません。

チユールリツプ、ベゴニヤみだれ咲くすみれ

インテリ・ガール

——恋愛なんてもうオールド・タイムズ、羞恥的感情もドシドシ揚棄しちやへ、われわれ女性といふものはもつともつと本質的にオリヂナルに出直さなくちやなりません、ミステリツクな殿堂も魅惑の神通力を失つて終ひました……百パーセントの明るさを背負つて人人を五十パーセント若返らせてゐるはたち前後のオフィシャル・オブ・インテリで、彼女はあるのです。

克服の十九の春を迎へたり

アド・ガール

チンドン屋が春のレボを賣してやつて來ました、若若しいコナシ、サミ
 センのばちも軽やかになまめいた聲を張り上げてゐるのも約ニツボンの
 浮世繪風景であります、街頭のアドも彼女のかうしたメイクアップによ
 つて存在性を保つてゐます、オヤチのサブなんてからインチキなもので
 す。

ひろめやの三角帽や春の雨

バイスクール・ガール

自轉車乗用の婦人がメツキリ殖えました、二三年前まではサンバ・婦
 人の獨占のカタチでありましたがこの頃は若いムスメさんにいたるまで
 ブラボーな姿を見せるやうになりました、男の獨壇場がかうして一步一
 歩侵略されて行くのです、時には男用のを失敬してマカロニの様なサチ
 ズムを流して行くものもあります。

自轉車の女學生も行くデギタリス

ダンス・ガール

波線の鮮かさ、ゆるいステップ、さてはテンポを早めたチャールストン、テクニカルなロッキングなどダンシングもやうやく普遍化の兆が見えて來ました、リズムカルで健康なこの新時代の遊戯こそ明日への期待であり近代的な教養だと信じられます、社会的に取つて代る日も來るでせう。

ダンシング夫人はたばこたしなめり

晩春初夏

夜ざくら

けんらん萬葉のさくら、紅姉粉妹の人の波、花と人が織り成す交響

樂のルツボ、白熱化する花の宴である、感覺の論理を求めて、ポオル。

モオラン患者は、かくて日本主義的祖春を、千金と惜むのである。

夜ざくら姉と妹と

昭和九年

エスプリ

蒼帝紅龍を點するところ、ニッポンのエイプリルはまさに世界に誇る
 さくら季節だ、ただに見た眼の美しさでなく、そこには固有のエスプリ
 が脈貫して居る、清く明るく正しく、感傷を伴はぬわれらの國民性――

櫻さいたわれらは中學一年生

アポロ

清明白露の氣高さのなかに、豊かな情緒を含んで、本朝櫻陰比事の妖
 しさにも喻へられる花のなかのアポロ、さくらの日本、雲か山からんま
 ん香冥たる、あるひは都市的構成美にタイ・アップして單彩を誇りた
 る、何れ可ならざるはない。

さくらにつばんあさばらけ

落花

撩亂舞舞たる千點万點、芝生に路面に水面に、見る見る花のカーベ
 ット、季春の風懷はまた新たなものがある、落花有情「くちひるを魚に
 吸はるるさくら哉」と其角晋子の三味境はまた、時代を超えた味覺を提
 供しては居ないか。

落花 ひら ひら 泉水を越え

躍進

空うららかに陽和いたる、天地風物明るく朗らかに、東行南行雲渺渺
 の好シーズンだ、モザイツクの桎梏から解放されて、總ての樹木は萌え
 草木は芽くみ新生命の獲得に躍進するのだ。

煙火だ 萌えは じめて 居る

ほたん

自然の美酒、人生のメツカを此處へ、牡丹の季節となつた、櫻が逝つて、嫩葉が萌えはじめるとまたひとしきり花、花の百花譜、カーネーション、アネモネ、金蓮花、芍薬などなど——わけてミス・ボタンの息詰る妖艶さに、季節的情炎は、一步一步と深まつて行く。

釋迦も世にある頃の牡丹さく

幻想

まひるの神秘、むらさきかすむ藤のはのめきに、あなたは生命の愛しさを感じないか、あをしろい幻想のドリームに、あなたはたましひの忍び音をきかないか、日本個有のマイ・フラワー、ふじの花に寄せる思慕しめる。

陽炎ふじはむらさきに

—以上隨筆は各篇とも當時寫眞説明として發表したものである。

小品

草餅

ほろほろと洞の花散る山道か

晩春初夏……キラキラと明るい、やる瀬ない頃だ。木木の葉っぱ、陽の光ま
でが潑刺とした中に、何處か、さうした感じを自分に與へる。

性來脆弱な自分は、その頃醫師の勧めもあつて病氣保養のため數ヶ月間山深
い郷里へ身を退いて居た、十八歳だつた。

合歡の花咲く郷里では、高齢な祖母が、祖先の古墳を守つて居た。

大體は市に隠れ、小隠は山に遁る、おぼろ氣にそんなことを考へながら、何
か廢殘に似たはかなさがあつた、そして往復四里余りの山道を、毎日のやうに

醫師の許に通つた。

さうした明け暮れの日、醫館を村境へかかる頃、一人の、若い女性が待ち受けて居るのだつた。

—あなた様のことは、いま、村で評判になつて居ります。

—おうちへは、妻の祖父達も古くから出入りしたと申します。

娘らしくぼつとしながら、憚るやうに彼女は云ふのだつた。

それにしても？自分は審らずには居られなかつた。やがて一本の枝道へかかる

—わたしの家は、つひこの近くで御座います、お遊びにいらつしやいませ

お辭儀して、娘さんは別れて行つた。

次の日も、そしてその次の日も、娘さんは待つて居た。

—お歸りなさいませ。

つつましやかに禮をして、彼女はいそいそと身を寄せかけて來た。

自分は相變らず、黙りこくつた。

—これ、おあがりになりません？

ふと、眼を遣ると、竹の皮に包まれた草餅だつた。

自分にはたと當惑した。

逡巡してると見ると、彼女は素早く摺り寄つてそれを自分の懐に押し込んだ

それでも自分は黙つて居た。

陽はうららかに輝いた、彼女の白いバラソルに青葉が反映して若い血を咬つた、人つ子一人通らぬ山道だ。

—あの、休んでお歸りになりませんか？

芝生に眼をやり乍ら、消え入るやうに慚ましく彼女が云つた。

——ええ、

生返事を興へて、自分は傍目も振らなかつた。そして何時もの枝道へ來ると

——では失禮いたします、お遊びにいらつしやいませ。

残り惜しさうに、彼女はしほしほと歸つて行つた。

それつ切り、彼女は姿を見せなかつた。

年が経つた、黄ない粉を振りかけた草餅が出はじめ桐の花が散る頃になる

と、吃度初初しい彼女のすがたを思ひ出す、なんと云ふ女だつたか、名さへ聞

かなかつたが……

草餅は、今でも自分の好物だ、出はじめると何處でも立止つて買つて歸る、馴染なかつた當時の彼女への心遣りでもあるかのやうに。

遣る瀬ない、明るいころの思ひ出だ。(昭和六年)

遠足

大正四年

見知らざる村に出にけり桐の花

顔白き女に逢ひぬ桐の花

柿

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 (子規)

春平は友人の十時に頼まれて頼子を「お嫁さんに！」との交渉にあたらざるを得なくなつた。

むろん、春平は頼子には初対面だつた。

そして頼子からは二、三日考へさして呉れとの返答を受取つた。

その翌日、彼女からの手紙で「御返事するからカフェ・ビルマまで」来て呉れとのことだつた。

その日頼子はもう、先きに來て待つて居た。

—そんなに長くお待ちはしません、ええ、時間は私の方で、ちゃんと切つたので御座いますもの。

と、彼女は左あらぬ態であつた。

—あの方の申込みは、御ことわり致します、實はあの瞬間に申し上げやうと思つたのですけど。

意外にきつぱりとした口調だつた、それにしては呼び出してまで恥を掻かさないでも好きさうなものだと、春平は内心いささか穩かてなかつた。

しかし、こんどは春平の方へ、だしぬけに頼子から結婚を申込んで来た『けつこんと云ふことに、無理にこだはらなくても』と打ち明けられた。要するに頼子は春平に戀愛を感じてると云ふのだつた。

矢つぎ早な展開さだつた。

—はは、それではあなたと十時との関係と同んなじぢやありませんか。

—お厭で御座いますして。

—僕こそ、十時よりもつと可能性はありませんよ、はは。

—と仰言いますと。

頼子のまなざしが、やけつくやうに注いだ。

—僕は、御婦人には一切、交渉は持たないことにして居ります。

—あなたは、観念的に仰言るのは御座いますまいね。

—内容はどうにしたところで、とに角一度は友人の掛り合ひをもつた方に僕が乗り出すなんて、古風な意味から云つてもピッタリ來ないぢやありませんか。

—世の掟はさうかも知れませんが、しかし至純な感情にもそれに倍する

控のあることを、お考へ下さいませんか。

——御言葉は僕を微笑ませます、だが僕の感情はそれだけのものぢやありません、世の慣はしにも犯されないし観念論にも飽き飽きして居ます、僕はもつとエクスペリメンテックな立場に居ます。

——あなたがトルストイアンだとは存じませんでした。

——トルストイアンでもニイチエアンでもありません、あなたは『女は耳で戀をする』つて話を知ってますか。

——耳ですつて？

——さうです、ワイルドの話です、だが美しい御婦人が戀をなさるのは當然ですね、ムーアぢやないがアブサン酒の飲用者にはアブサン酒が必要なやうに……しかし僕には當分一人で冥想と云ふカビ臭い奴が必要なんです。

——わたしの申上げることには不遜が御座いましたなら御許し下さいませ、妾は自分を偽ることは出来ません。

——僕は一度結婚したことがあるのです。

春平は微笑を顔面に現はし乍ら云つた。

——それが何うして問題なのでせう、それであなたは世の中をどう御覽になりますか。

——さうです問題ぢやないのです、牝鷄が羽ばたいて行つたと云ふ程度のもに過ぎないのです、そして聰明であるらつしやるあなたは、もうこれ以上あなたの感情を僕へ押し付けてはならないと云ふことを、おわかりになつて下さると信じます。

會見は、それつ切りだつた。

春平はかうした事情をあげて一切、十時に報告してやった、しかし十時はそれをどんなに感じたのか妙なコヂレを見せて、春平から離れて行った。

頼子は頼子で春平の隆口を利用してゐると知らせて来たものがあつた。

——人間と云ふ奴は、直ぐにあれだ。

今さらながら春平は、バカバカしくてならなかつた。

秋だつた、もぎたての柿だと云つて御所柿の大きなのを届けて呉れた者があつた、柿は少年時代から彼の唯一の好物であり一種の懐しささへも持つて居た、その豊潤で艶艶した肌を思ふと堪へられなかつた、彼はさつそく一つを取つてザクリーと白い齒を立てた、冷めたい、測り知ることの出来ない甘美な液汗が、全身に滲み込んだ、春平には珍しい嗜欲だつた。

——友も女も要らない。

柿に如かめやもと、更け行く夜の底に彼はつくづくと思つたことである。

(昭和七年)

手

石山の石より白し秋の風（芭蕉）

1

白い手の女、白い白い手の女。

——潤露箋、ください。

——ラインの、お赤いんですね。

聲に應じて、透き通つたその手が、そつと感觸の一冊を抜き取つた、そして
バラバラツと繰り擲げた。

クリーム色のアート・ペーパー、濃厚で新鮮なラインと匂ひ、それに交つて
ふたつの蛇のやうな生きものが、なんと執拗にからみついて離さなかつた……

滴るやうな瞬間であつた。

——噫、あの手が秘めた夜の神秘？

何時も、進一郎は思ふのだつた。

そしてまた何時も、此處の店を訪れるのだつた。

しとやかななかにも、彼女は屹度、奔放な情熱をくるんてるに違ひない。

2

——手は魔性だと申しますもの。

鶴後の、さる旅館のお蔭さんが、なめらかな手を拭き拭き進一郎に話した。

——わたしなんか、多でもアカギレなんて御座いませんの、冷めたい水をふ
んだんに使ふんで御座いますけど。

お蔭さんは、象牙のやうな手の、持主だつた。

昔、支那に白足和尚と云ふのがあつた、雨上りに泥水をくぐつても、些つとも汚れなかつたと云ふ話を、進一郎は思ひ出した。

3

それから、十年経つた。

進一郎は新婚の夜、さつそく女の手を見た。

——あなたは、階級性がないんだわ、手の階級性と云ふことを考へない？

ズバリと、女が云つた。

——美に、階級はないよ、絶對的なもんだよ。

つとめて温順しく、進一郎は云つた。

——認識不足！

さう、女はおつ被せて、そして

——あなたのやうな藝術家は、どんどん取り残されちやうことよ。
と、付け足した。

——さうかね、藝術と云ふものは、そんなものぢやないよ、理屈なんてクダらぬことを云はないだけ、總てのものの母体でもあるんだよ、そして俺には俺の、一つの憧れがあるんだ。

笑ひ乍ら、進一郎は云つた。(昭和八年)

句集「六月祭」終

跋

私の父は三十七で死んだ、そして可憐なりしその父の子も、正に今年で同じ馬蹄を加へたのだ、感慨めいたものが身内を掠める。

當時、私は數へ年三つだった、そして可なり遠いものに思つて居たこの年齢に自分が達して見ると『おやちも若くて死んだもんだ』と思はざるを得ない。

父とは一日早く、六つだった姉が棺を蔽ふた、幾許もなく父の實弟が易賢、一家はまるで眼に見えない死靈に憑かれて居るやうなものだった。

母も幾度びか死線を彷徨し大阪市で醫師を開業した許りの、前記の伯父の急遽な歸郷と看護とによつて九死に一生を得たが、こんどは伯父自身が産れた。

『瞳孔——黒い部分が大きく擴がったら死ぬんだと思つて呉れ』と伯父はまだ

少女の、母親の妹達に教へた相だ、果してその日の夜息が絶えた、享年二十九死ぬるとき『流るる水に散る紅葉……』云つた意味の辭世句を口誦んだと云ふ、私はその後伯父の句帳でもあるかと、古い遺品を幾度びも蔵の中に探つたけど、遂に見當らなかつた。

私の生家は祖父の時代に人手に渡つたと云ふ地勢も一段と高い場所の、石垣の高く廣いその舊屋敷を眼と鼻の、小さい流れを向ふにした家だつた、家の裏には梅、李、柿の木などがあつて『裏』と云ふものの懐しさと神秘さを私に浸み込ませて呉れた。

でも、屋敷の人は實直であつた、その屋敷内に實つた地方には珍らしいアスナロの幾個かを毎年のやうに「大谷屋の坊つちやんの爲に……」とて届けて呉れた、今でもアスナロの聲を聞くと懐しく輝しい。

さて、私の生國は廣島縣賀茂郡の最北で、山も川も平平凡凡な一村邑に過ぎない、ただ一つ、最も古い時代の國道筋に當り和名抄にも『造果』として見え賀茂九郷の一とされて居た、延喜式には左宇鹿とあり驛馬二十四を備へ驛子も十數名配置されて居た、造果保、早小鹿とした古文書もある、また遡つて類聚國史には安藝國驛家十一處の内に數へられ送迎繁多とされたが最近村内で貴人の古墳を發掘し石棺の外に劍や劍が出たと報じられて居るのも矢張り交通上の何等かの関係によるものとも見れる、萬葉時代人も幾他同所を往復したであらうことを思へば、一味懐古の情が湧かざるを得ない、峠を越し乍ら此の地方の産物であつた白木綿が細いちめんに作られて居るのを詠んだ歌なども古くから記されて居る、なほ足利尊氏の手で嚴島神社へ神領地として寄進したこともあり裕福な村邑とされて居た『山を負ひ畑を前に平凡な佛教信者の家の長男』と

私自身の歌にもあるやうに、全国的に名のある一向宗の安藤門徒の流れが全村を掩ふて居たことも争へない、幼い記憶では風と共に群り来る稲雀の捕獲をさへも、年寄連は禁じて居た。

私は生地で七歳まで母方の祖母の手に育てられた、七歳で、小學校に就學するやうになつて、一日も忘れ難いとして居た母の住む新開地×市に出て來た。幼い頃の二ヶ年を母と別れて暮した孤兒の私を思ふとき、私は今でも不覺な暗涙を覚えるのだ、ひた向きた母性への思慕、嘘、母の姿を眼の邊りにしたとき、幼い魂の悦びはどんなであつたか、人類は母の手によつてこそ甦る、私の性格の反面に尙且越え難い一線があるとしたなら、かうした環境による所が大きいと云はなくてはならない。

父は三十歳頃から死の當時まで引續き郡會議員に選出されて居た、無論、父

の顔なんて、私は知る由もない、警察官出身で元郡長だつた同郷のM氏なんかから時折片鱗を聞かされる位のものだ。

私は此の一本を亡父秀明の爲に、又一本を母の犠牲となつて逝つた若き伯父一郎の爲に、デヂケートしたいと思ふ。

昭和九年十一月二十一日印刷
昭和九年十一月二十六日發行

(定價金壹圓五拾錢)

六 月 祭

著 者	高 橋 彰 三
發 行 者 兼 印 刷 所	吳市藏本通八丁目一四番地 高 橋 彰 三
印 刷 所	吳市藏本通八丁目一四番地 白 虹 社 印 刷 部

發行所 白 虹 社
吳市藏本通八丁目一四番地ノ一

終



健